

## オオナムチとスセリヒメとふしぎな琴のお話

・川村優理



オオクニヌシは、その前の名前をオオナムチといました。  
オオナムチには兄弟の神さまたちがたくさんいて、ヤソガミと呼ばれていました。  
このヤソガミたちが、オオナムチをいじめてしかたありません。  
とうとう命をとられそうになり、オオナムチは 地下にあるネノカタスクニというところのスサノオノミコトのとこ

スサノオノミコトを訪ねますと、そこに、スサノオノミコトの娘のスセリヒメが出てきました。  
オオナムチとスセリヒメは、目と目を合わせただけで恋に落ち、すぐに結婚しました。  
スセリヒメは、父のスサノオノミコトのところに行って言いました、  
「とても立派な神さまが、お父さまを尋ねて来ておられます」

スサノオノミコトは、オオナムチに  
「そこの若者、こっちに来なさい」  
と、声をかけて、蛇の室（むろ）に連れて行き、蛇がうようよいる室に閉じ込めてしまいました。  
オオナムチは、驚きましたが、スセリヒメが、こっそり訪ねて来て、蛇の領巾（ひれ）をオオナムチに渡しました。  
「もし蛇がかみつこうとしたら、この領巾を3度振って下さい。蛇を追い払うことができます」  
オオナムチは、スセリヒメの言う通りにして、その夜は、蛇の室（むろ）の中でも、安らかに寝ることができました。

次の日。スサノオノミコトは、オオナムチを別の室（むろ）に連れていきました。  
そこは、ムカデとハチの室です。  
驚いているオオナムチをムカデとハチの室に閉じ込め、スサノオノミコトは、行ってしまいました。  
けれど、スセリヒメがやってきて、ムカデとハチの領巾（ひれ）を渡して言いました。  
「もし、ムカデやハチに刺されそうになったら、この領巾を振って下さいね。」  
スセリヒメの領巾のおかげで、オオナムチは、ムカデやハチに刺されずにすみました。

スサノオノミコトは、こんどは、矢を広い野に射込みました。

「あの矢を捜しておいで」

オオナムチは、野の中に入っていました。矢は簡単に見つかりません。どんどん奥に入っていく間に、スサノオノミコトは、野に火をかけてしまいました。

枯野に、火がぱっと広がりました。

オオナムチは、どこから逃げ出せばいいのかわかりません。

途方にくれていると、小さいネズミがやってきてふしぎなことを言いました。

「中はほらほら、外はすぶすぶ」

外がすぶすぶ燃えていても、中にはほら穴があるというのでしょうか。

オオナムチは、足もとの土を、踏みつけてみました。

大きな穴がぽかんと開き、オオナムチは穴の中にどすんと落ちました。

「ほんどだ。ネズミの言ったとおり、ほら穴の中まで火は届かないぞ」

オオナムチは穴の中に隠れて、野の火がおさまるのをじっと待ちました。

そのうちに、野火は、オオナムチの頭の上を通り過ぎて行ってしまいました。

「やれやれ。なんとか助かったよ」

さっきのネズミが、矢を探し出し、オオナムチのところへ、くわえて、持って来てくれました。

ただ、矢についていた鳥の羽根は、ネズミの子どもたちがすっかり食べてしまったようでした。

とうとうオオナムチが焼け死んでしまったと思ったスセリヒメは、お葬式の道具をもって、泣きながら野にやって来ました。父のスサノオノミコトも、一緒です。

そこに、オオナムチが矢を持って出て行きました。

「スサノオさま、ご心配なく。わたしはご覧の通り、生きています」

スサノオノミコトも、オオナムチを認めるほかはないと思ったようです。

「しかたない。わしの家に来い」

と、言いました。

「さあ、わしの頭のシラミをとってくれ」

スサノオノミコトは、ごろりと横になりました。

ところが、スサノオノミコトの頭にうようよとついていたのは、シラミではなくてたくさんのムカデです。

それを見たスセリヒメが、こっそり、ムクの木の実と赤土をもってオオナムチに渡しました。

オオナムチは、木の実をちぎって赤土と一緒に口の中に入れ、赤いつばをぺっぺっと、吐きました。

スサノオノミコトは、

「ムカデを食いちぎって吐き出しておる。なんとかかわいい奴ではないか」

と、すっかり安心し、眠り込んでしまいました。

オオナムチは、眠っているスサノオノミコトの髪の毛を、屋根の垂木（たるき）に結びつけました。

それから 500 人の力でも動かせないほどの大きな岩で家の戸口を外からふさぎました。

こうしておけば、スサノオノミコトは、もう追いかけて来ないでしょう。

オオナムチはスセリヒメを背負うと、スサノオノミコトの宝物、生太刀（いくたち）と生弓矢（いくゆみや）と、天の詔琴（あめのぬごと）をもって逃げ出しました。

生太刀と生弓矢はネノカタスクニの魔法の力をもつ太刀と弓矢です。

天の詔琴もネノカタスクニの魔法の力をもつ琴です。

「もうだいじょうぶ」

と、安心したとき、天の詔琴が木に触れて、大地が揺れ動くほどに鳴り響きました。

その音で、眠っていたスサノオノミコトが目をさました。

「待て。待つのだじゃ」

スサノオノミコトは、髪の毛が垂木に結び付けられているので、動くことができません。

ほどいている間に、オオナムチはスセリヒメをおぶって、けんめいに逃げました。

やっとのことで髪の毛を垂木からほどいたスサノオノミコトは、ネノカタスクニと、アシハラノナカツクニとの境のヨモヒラツサカまで追いかけた。

が、遥か遠くの坂の上まで逃げていく、オオナムチを見上げ

「おい。お前が持っている生太刀と生弓矢で、兄のヤソガミたちを坂の尾根に追い伏せ、河の瀬に追い払いなさい。お前は大国主神（オオクニヌシノカミ）となり、わが娘スセリヒメを正妻として、宇迦の山のふもとに、地中の岩盤に宮殿の柱を太く立て、棟（むね）には千木（ちぎ）を空高く立てて住むが良い。」

と、大きな声で言いました。

こうして、

オオナムチは、オオクニヌシノミコトとなり、スセリヒメと力を合わせて、アシハラナカツ国を治めることになったのでした。

さて・・・それから何年も何年も経たようです。

アメノヌゴトは、自分が目をさましたことに、ぼんやりと気が付いていました。

時はヌゴトを通り過ぎ、いろいろな思い出は、星のうずのように、ヌゴトをとりまいて、小さな宇宙ができていました。

いつのまにヌゴトは眠ってしまっていたのでしょうか。オオナムチもスセリヒメもいません。イクタチも、イクユミヤもいません。

ほこりをかぶった、たくさんの物たちの間で、ヌゴトはひっそりと横たわっていたようです。たぶん古い屋根裏部屋の中のようなのでした。小さなまどから、おひさまの光がさしこみ、空気の中にまうほこりが、きらきらと光っていました。

がたんと音がして、誰かが、屋根裏部屋の戸を開け、中に入ってきました。小さい女の子。それから、少し背の高い男の子。

「これは、何？」

女の子がアメノヌゴトをひろい上げました。ヌゴトの2本の弦は、もうはずれていて、音は鳴りませんでした。

「琴みたいだね。小さいけど。」

男の子が、のぞきこんでいました。

「それにしても、ずいぶん古そうだ。」

ヌゴトは、きっといつか、二人が自分の物語を読むだろうと思いました。スサノオさまが、いつか自分に、そうおっしゃっていたような気がしました。